

# 令和元年度 第3回 総合教育会議

令和元年11月27日(水)  
午前10時から正午まで  
県庁別館8階第一会議室A、B、C

## 次 第

### 1 開会

- (1) 知事挨拶
- (2) 教育長挨拶

### 2 議事

- (1) 一人一人のニーズに対応した教育の充実
- (2) その他

### 3 閉会

# 令和元年度 第3回総合教育会議 座席表

日時：令和元年11月27日(水) 午前10時～正午  
 場所：県庁別館8階第一会議室A、B、C

(  
入  
口  
)

木苗  
直秀  
教育長  
○

川勝  
平太  
知事  
○

地域自立のための  
「人づくり・学校づくり」  
実践委員会 ○  
矢野 弘典 委員長

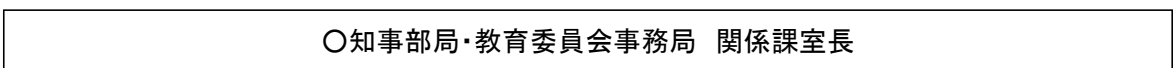
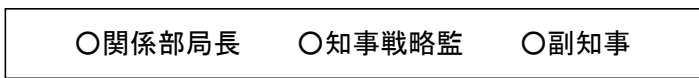
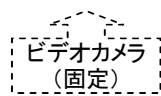
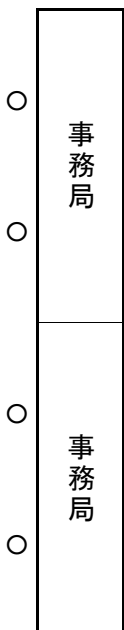
○ 渡邊 靖乃 委員

伊東 幸宏 委員 ○

○ 藤井 明 委員

小野澤 宏時 委員 ○

○ 加藤 百合子 委員



(  
入  
口  
)

## 一人一人のニーズに対応した教育の充実に関する論点

---

一人一人が活躍し、豊かで安心して暮らせる社会を実現するためには、誰もがいつでも新しいことにチャレンジできるとともに、それぞれの夢に向かって挑戦できる環境を整備することが必要である。

多様な人々が社会で生き生きと活躍できるようにするために、特別支援教育においては、障害のある幼児児童生徒の自立と社会参加を目指し、一人一人の教育的ニーズに対応した指導の充実と切れ目ない支援体制の構築を図ることが重要である。

また、外国人労働者受入れ拡大も踏まえ、異なる文化的背景を持つ人々が共に支えあい、共に学びあう教育環境の充実に向けて、増加する外国人児童生徒等に対する支援の充実を図る必要がある。

そして、全ての子供たち一人一人が夢の実現のために挑戦を続け、優れた能力を更に伸ばすことができる教育を推進することが重要である。

### 論点：誰もが夢と希望を持ち社会の担い手となる教育の推進

全ての人々が、自らが持つ能力・可能性を最大限に伸ばし、夢や希望を持って社会の担い手となれる教育を推進するために、具体的にどのような取組が考えられるか。

#### 【検討の視点】

- ・特別支援教育における就学前から就労までの切れ目のない支援、特に増加する発達障害のある子供への支援の充実
- ・外国人児童生徒等に対する日本語指導をはじめとする幅広い学び、キャリア教育の充実
- ・子供たち一人一人の夢の実現に対応した教育の提供

## 一人一人のニーズに対応する教育の充実に関する実践委員会の意見の総括

## ＜伊東地区新構想高校への改編について＞

## (第3回実践委員会)

- ・人口減少を理由として学校の統廃合を進める考え方は、非常に後ろ向きであり、本来その地域にある特色や良さを塗り潰していくように感じる。国内のみならず国外から生徒を募集することにも目を向けて、分校として存続させていくことはできないか。
- ・城ヶ崎も含めた伊東市全体にアートの聖地のようなイメージを持たせる構想とすることが大切である。場所が移っても特色ある教育を最大限に活かせる教育が必要である。分校跡地はアトリエなどの関連施設として活用していくと良い。
- ・既存の芸術科のある高校の創作活動を企業と連携して官民一体となって支援し広報するなど、県として何ができるのか考えていくことが必要である。また、商業と美術をくっつけて両方の良さを活かすと新たな教育が生まれてくる。
- ・芸術家を育てるためには、自然に囲まれている環境は有利だが、他者の作品をみる機会も必要である。アトリエのような創作活動の場と他の作品に触れる交流の場を両立できる学校になれば良い。
- ・静岡県を牽引する人材を育成するために、一流の指導者や才能のある生徒を集めることが重要である。海外から学生を受け入れることを視野に入れ、城ヶ崎分校の建物を寮に改築することも考えられる。
- ・保護者も地元の方々も同意しているのであれば無理押しはしないが、あたかも教育委員会の既定方針であるかのごとき説明は時期尚早である。

## (第4回実践委員会)

- ・新構想高校では、商業科とアートコース、さらに特別支援学校の生徒たちの融合によるシナジー効果(相乗効果)が期待できる。「アートの聖地づくり」では、伊東の環境やアートに惹かれて海外から学びに来る学生を受け入れるような教育の仕組みづくりを考えていくと良い。

- ・3校が一つの校舎に集まることでこれまで無かった新たな可能性をカリキュラムの中に取り込んでいけるような意識を前面に出していくと地域の支持を得られるのではないかと。
- ・高校教育の在り方について、高校再編の問題を中心に置いて、教育委員会や実践委員会から委員を選出し、さらに地域の代表も加えた有識者会議を開催して議論を進めていくと齟齬がなくなる。

### <全国学力・学習状況調査の結果の活用について>

- ・地域や保護者に結果をきちんと公表して、子供たちの通う学校の現状を把握してもらうことが本当の有効活用の方法である。
- ・地域に貢献できる人材育成の観点からは、勉強以外にも子供たちに規則正しい生活習慣を身に付けさせることが大切である。子供たちは様々な人と接することで才能を開花させていくので、コミュニティ・スクールなどを活用し、環境整備に目を向けていく必要がある。

### <論点：誰もが夢と希望を持ち社会の担い手となる教育の推進>

#### (特別支援教育における支援の充実)

- ・静岡県の特別支援教育は、子供と教師の関係がマンツーマンに近く、非常に行き届いた教育をしている。
- ・特別支援学校の多機能化を目指すが良い。学校教育だけではなく地域の相談機能等(児童家庭支援センターの一部業務委託等)を持たせることはできないか。
- ・子供たちの可能性は無限大であり、充実した学校生活を過ごすためには、子供たちに力を付けていくことが大切であり、保護者の理解は不可欠である。平均値に頑張っただけで付いて行こうとする子供たちへの教育や支援を無視してはいけない。

#### (外国人児童生徒への幅広い支援の充実)

- ・既に日本で進学や就職して頑張っている先輩たちをロールモデルとして紹介するなど、学びに対するモチベーションへの支援が非常に重要である。また、将来、外国人児童生徒が日本の社会で労働者として生きていく際の権利と義務をきちんと学べるサポートを手厚くしていく必要がある。

- ・多言語のコミュニケーションスキルとしてポケトークを活用するなど、子供たちのメリットが何かをまず考えること、そして生徒を直接指導する教師の負担を減らし、どのようにサポートしていくかが重要である。
- ・多くの外国人児童生徒にとって、悩みを聴いてくれる場所や仲間の存在は大切である。地域社会全体で子供たちの不安を取り除く温かい支援があると良い。
- ・eラーニングを活用して学習するバーチャルな制度と、高校や大学進学等に備えて直接学習支援してくれる顔の見える支援の両方を仕組みとして作る必要がある。また、子供たちだけではなく、支援する側へのサポートや教員への研修が必要である。単に日本語ができるだけでは効果的な支援は難しい。

#### (子供たち一人一人の夢の実現に対応した教育の提供)

- ・子供たちに寄り添い、良いところを気付かせ、やる気にさせることができる良きリーダーや指導者を育成する仕組みが必要であり、そうした人材を育成する経験豊富なインストラクターをつくらなければ子供たちの成長につながっていかない。
- ・教師はコーチとして子供たちを導くことが大切であり、学力的な部分としっかりとした道徳観や倫理観を兼ね備えた一流の教師を目指す必要がある。
- ・子供たちの能力を伸ばすためには親の関わり方は大切であり、親は子供に勇気を持たせる関わり方をしなければならない。また、学校が多様化し、様々な環境と機会を提供していく必要がある。
- ・定時制高校で途中退学する生徒が増えていかないよう、きちんと卒業まで結びつける指導が大切である。定時制高校に通う生徒の事例研究から、サポートの手法を手厚く研究する必要がある。
- ・中学生を対象とした「未来を切り拓く Dream 授業」は、様々な分野で活躍し自己効力感を持った子供たちが県下に広がっていくための大きな未来への投資である。また、子供たちの才能を開花させるためには、中学校教育を改革することが不可欠である。

**第2回総合教育会議開催結果に関する発言**

**伊東地区新構想高校への改編に関する意見**

①〔第3回実践委員会〕

- 人口減少を理由として学校の統廃合を進める考え方は、非常に後ろ向きであり、本来その地域にある特色や良さやを塗り潰していくように感じる。
- 城ヶ崎も含めた伊東市全体にアートの聖地のようなイメージを持たせる構想とすることが大切である。
- 新構想高校で芸術が学べるように、場所が移っても特色ある教育を最大限に活かせる教育をしていく必要がある。分校跡地はアトリエなどの関連施設として活用していくと良いのではないか。
- 芸術分野の魅力ある学校として、国内のみならず国外から生徒を募集することにも目を向けて、分校として存続させていくことはできないか。
- 県内に芸術分野に注力する高校が2校も3校も必要なのか疑問である。既存の芸術科のある高校の創作活動を企業と連携して官民一体となって支援し広報するなど、県として何ができるのか考えていくことが必要である。
- 芸術家を育てるためには、自然に囲まれている環境は有利だが、フラスコの中に入ったようにしてつくっていても、他者の作品をみる機会がなければある線を突破できない。アトリエのような創作活動の場と他の作品に触れる交流の場を両立できる学校になれば良い。
- 日本の高校へ留学を志望する学生は、ホームステイではなく寮滞在の希望者が多い。海外から学生を受け入れることを視野に入れ、城ヶ崎分校の建物を寮に改築することも考えられる。
- パイロットスタディケースとして、商業と美術をくっつけて両方の良さを活かすことで、新たな教育が生まれてくるのではないか。
- 保護者も地元の方々も同意しているのであれば無理押しはしないが、あたかも教育委員会の既定方針であるかのごとき説明は時期尚早であると言わざるを得ない。
- 静岡県を牽引するようなリーダーを育てる仕組みをつくるためには、予算を獲得し、一流の指導者や才能ある生徒を集めることが重要である。

- 分校を存続させることには、存続させたいと気持ちを寄せている人や地域の意見などがつながらない限り、理想だけを述べても難しいのではないか。
- 生徒自らが講師を呼ぶなど授業を生徒がつくっていくような公立高校が全国に先駆けてできると、静岡から多様性に触れる教育のモデルケースになっていくのではないか。

## ②〔第4回実践委員会〕

- 新構想高校では、商業科とアートコース、さらに特別支援学校の生徒たちの融合によるシナジー効果(相乗効果)が期待できる。「アートの聖地づくり」では、伊東の環境やアートに惹かれて海外から学びに来る学生を受け入れるような教育の仕組みづくりを考えていくと良い。
- 例えば、「特別支援学校」と「アート」が生み出す「障害者アート」や、「特別支援学校」と「観光」が生み出す「製品プロデュース」など、3校が一つの校舎に集まることでこれまで無かった新たな可能性をカリキュラムの中に取り込んでいけるような意識を前面に出していくと地域の支持を得られるのではないか。
- 来年開催のオリンピック・パラリンピックを機会に、パラリンピアンに来てもらえるような環境整備と交流できる体制づくりをすると良い。
- 高校の在り方に関して今後も見続けてフォローする協議体が必要ではないか。高校再編の問題を中心に置いて、教育委員会や実践委員会から委員を選出し、さらに地域の代表も加えた有識者会議を開催して議論を進めていくと齟齬がなくなる。

## 全国学力・学習状況調査の結果に関する意見

- 全国学力・学習状況調査の結果を教師の授業改善だけに活用するのではなく、地域や保護者にきちんと公表して子供たちの通う学校の現状を把握してもらうことが本当の有効活用の方法である。
- 地域に貢献できる人材育成の観点からは、小学校では勉強以外にも、運動、食事、睡眠、遊びなども重視し、子供たちに規則正しい生活習慣を身に付けさせることが重要である。
- 子供たちは地域の行事に参加することを通じて地域とつながっているが、学校はあまり保護者や地域と協働して活動していないのはもったいない。子供たちは様々な人と接することで才能を開花させていくので、コミュニティ・スクールなどを活用し、環境整備に目を向けていく必要がある。
- 子供たちに自ら勉強したくなるような夢や目標を持たせ、自分の得意なことや好きなことを世の中で役立たせるにはどうしたら良いかを意識付けしていくことは、勉強ができること以上に重要である。



## 論点：誰もが夢と希望を持ち社会の担い手となる教育の推進に関する発言

### 特別支援教育における支援の充実に関する意見

- 静岡県の特別支援教育は、子供と教師の関係がマンツーマンに近く、非常に行き届いた教育をしている。是非、実践委員の方々には実際に教育現場をみてもらいたい。
- 特別支援学校の多機能化を目指すが良い。学校教育だけではなく地域の相談機能等(児童家庭支援センターの一部業務委託等)を持たせることはできないか。
- 発達障害の児童生徒は多数おり、留学生の中にも障害のある生徒はいる。子供たちの可能性は無限大であり、充実した学校生活を過ごすためには、子供たちに力を付けていくことが大切であり、保護者の理解は不可欠である。
- もっと上を目指したいと考える子供たちへの専門性の高い教育も大切だが、平均値に頑張っけて付いて行こうとする子供たちへの教育や支援を無視してはいけない。

### 外国人児童生徒等に対する支援の充実に関する意見

- 外国人児童生徒をサポートする活動では、学習面以外でも既に日本で進学や就職して頑張っている先輩たちをロールモデルとして紹介するなど、学びに対するモチベーションへの支援が非常に重要である。
- 将来、外国人児童生徒が日本の社会で労働者として生きていく際の権利と義務をきちんと学べるサポートを手厚くしていく必要がある。
- 他県の事例では、多言語のコミュニケーションスキルとしてポкетークが学校で多く使われている。態勢やマニュアルばかり議論するのではなく子供たちのメリットは何かをまず考えること、そして生徒を直接指導する教師の負担を減らし、どのようにサポートしていくかが重要である。
- 多くの外国人児童生徒にとって、悩みを聴いてくれる場所や仲間の存在は大切である。段階的にその子に合った社会教育を行っていく必要があるが、資金も人材も足りない現状では、地域社会全体で子供たちの不安を取り除く温かい支援があると良い。
- 学習支援については、eラーニングを活用して今の生活をリセットしなくても学べるバーチャルな制度と、高校や大学進学等に備えて直接学習支援してくれる顔の見える支援の両方を仕組みとして作ることが必要である。
- 子供たちだけではなく、支援する側へのサポートや教員への研修が必要である。また、日本語教室のスタッフが日本語教育の研修を受けられていない。単に日本語ができるだけでは効果的な支援は難しい。

## 子供たち一人一人の夢の実現に対応した教育の提供に関する意見

- 子供たちに寄り添い、良いところを気付かせ、やる気にさせることができる良きリーダーや指導者を育成する仕組みが必要である。また、そうした人材を支援し育成できる経験豊富なインストラクターをつくらなければ子供たちの成長につながっていかない。
- 子供たちの能力を伸ばすためには親の関わり方は大切であり、子供たちの才能を伸ばすこともあるが、逆に芽を摘んでしまうこともある。親は子供に勇気を持たせる関わり方をしなければならない。
- 子供たちに学習への目的意識を持たせるためには、学校が多様化し、様々な環境と機会を提供していく必要がある。子供たちが反応したことを教師が指導に活かしていくことが大切である。
- 答えを教えるのではなく、答えの導き方を教えるという観点から、教師はコーチとして子供たちを導くことが大切であり、学力的な部分としっかりとした道徳観や倫理観を兼ね備えた一流の教師を目指す必要がある。
- 定時制高校において途中退学してしまう生徒が少なからずいる現状では、きちんと卒業まで結びつける指導が大切である。定時制高校に通う生徒の事例研究から、サポートの手法を手厚く研究する必要がある。
- 「未来を切り拓く Dream 授業」の昨年度参加者による一年後アンケートの内容から、様々な分野で活躍し、自己効力感を持って新たな一步を踏み出している生徒たちの姿が読み取れる。こうした先駆的な取組をする子供たちが県下に広がっていく「Dream 授業」は、大きな未来への投資である。
- 子供たちの才能を開花させるためには、中学校教育を改革することが不可欠である。心も身体も大きく成長する重要な時期なので、例えば学区を解体して、専門的な指導者がいる学校へ放課後通えるようにするなど、充実した3年間をサポートする仕組みづくりが必要である。

欠席予定の委員から「一人一人のニーズに対応した教育の充実」について、以下のとおり意見をいただいた。

**特別支援教育における就学前から就労までの切れ目のない支援、特に増加する発達障害のある子供への支援の充実**

- ・就労への支援が必要である。一部では、高校2年生あたりから作業所への「就職活動」が始まる。作業所に断られる生徒も少なくない。(白井委員)
- ・知的、発達障害のある青年を対象に学びの場を提供し、4年間を通して自立支援や就労に向けた支援を行う「カレッジ早稲田」では、2年間の生活支援、2年間の就労支援で自立へとつなげている。(白井委員)
- ・特別支援の高校が遠い。通学に2時間かかる生徒もおり、疲労困憊して心身が参ってしまう。新規開設よりも、一校の種別を増やすことはできないか。(白井委員)
- ・特別支援学校の多機能化を目指す。学校教育だけでなく地域の相談機能等(児童家庭支援センターの一部業務委託等)を持たせることはできないか。(白井委員)
- ・大学の配慮を要する学生の教育を支援する。障害者差別解消法で差別が禁止されていることを根拠とするのみであり、修学の支援体制が脆弱である。(白井委員)
- ・放課後デイケアの質の問題がある。(白井委員)
- ・本人だけではなく家族も当事者であることから、きょうだい児の会や親の会の支援が必要である。(白井委員)
- ・発達障害のある子が増えているのか、以前より皆の知識が増えて顕在化してきているのかは分からないが、現実として、発達障害の子供が増加しているのであると思う。発達障害は、多くの子に出来てもその子には出来ない部分がある。しかし半面、その子特有の秀でた部分があるという話を聞く。まずは、早いうちに、どの部分で配慮が必要かを親も周囲も認識して情報を共有し、お互いに気持ちよく暮らせる状態をつくるのが大事である。(杉委員)
- ・就業に向けての支援ということでは、「共生・共育」が有効であると思う。(杉委員)

## 外国人児童生徒等に対する日本語指導をはじめとする幅広い学び、キャリア教育の充実

- ・「NPO 法人 ONES」では、大学生が主な支援者となり教育委員会と協力関係を持ち、外国人児童・生徒や日本語指導が必要な子供たちに日本語や教科学習支援を行っている。小中学校に出向き、担当する児童の日本語教育をするだけでなく、教室に入りそばについて教科学習の支援を行っている。言語支援をするだけでなく、取り出し授業もしている。このような取組をモデルとして、全県に広められないか。(白井委員)
- ・高校、大学への進学支援が必要である。帰国子女として扱われないので、入試への対応が非常に難しい。通学した学校が各種学校扱いであると、行政の支援が入りにくい。進学の経済的問題もある。(白井委員)
- ・修学させる義務の範囲が「国民」であるために、積極的な支援を受けにくい。県民の一員(住民・市民)としてしっかり支援していく。(白井委員)
- ・親支援が必要である。子供は言語を取得しても、親の日本語取得が難しく、親や子供が孤立することがある。転居が多いとなおさら、親のネットワークが作りにくい。学校で配布するプリントへの配慮や、担任の配慮だけでなく、同郷の保護者とのネットワークづくりなども有効な支援である。(白井委員)
- ・子供本人だけでなく支援者の支援が必要。教員への研修が必要である。また日本語教室のスタッフが日本語教育の研修を受けられていない。ただ日本語ができるだけでは効果的な支援は難しい。(白井委員)
- ・外国人ではない子供への教育が必要。外国人の子供が日本語を話せるようになればよいのではない。周囲の子どもが多様性を理解し、多文化共生できることが必要。教育のチャンスでもある。(白井委員)
- ・外国人の子供は、親とともに母国を離れ、母国の文化なども良く理解しないうちに日本に来て、急に日本語圏で暮らさねばならず、親も子供を思いやる余裕がなく日本語ストレスの中でもがいているのだと思う。日本語を学ばないと日本人社会についていけないだろうが、まずは、親が家庭で母国の文化や風習を教えるとともに子供に寄り添い、安堵の場所を作り、その上で日本への理解を深めさせることが大事であると思う。(杉委員)
- ・ブラジルから小学生の時に日本に来て、低学年のドリルをがむしゃらに勉強し自分のものにして、日本人と伍して負けずに自分磨きをした宮城ユキミさんは特異なケースであるが、多くの外国人の子には、悩みを聴いてくれる場所や仲間があることが大事であると思う。そして段階的に、その子の進捗にあった社会教育を身に付けさせる必要があると思うが、資金も人も足りない現実がある。大きな言葉の壁はあるが、地域社会全体で外国人の子供の不安を取り除く温かい支援があると素晴らしいと思う。(杉委員)

## 子供たち一人一人の夢の実現に対応した教育の提供

- 中学不登校、高校進学しなかった（できなかった）人、高校中退者、出産・育児等により学業を中断した人への学び直しの支援が必要である。夜間中学については動きがあるが、学び直しを広く捉える必要がある。（白井委員）
- 社会的養護後の子供の自立支援が必要である。18歳等、児童年齢を超えて社会的養護を措置解除されても、住宅の賃貸契約、就職、携帯電話等の契約など様々な場面で保証人が必要となる。また住居費が高かったり、身近に親のように頼れる人がいなかったりする。以前と違って、住み込みの仕事も少ない。そのため、名古屋の施設出身者の職親の会「ルーキーズ」では、地元の60社余りの企業が会員となり、職場体験、住宅の提供を行っている。  
（白井委員）
- 将来日本を代表するアスリートになるという夢をもつ子やノーベル賞を取る努力を続けるという子もいるであろうが、今の子供や親の多くは、有名大学に入学して、有名企業に入りそれまでの知識・学歴をもって、安定的な収入を得るという漠然とした目標を目指しているように思える。今の時代、企業は、ただ利益を上げて納税し、雇用を創り出すだけでなく、業務を通じて、社員を大事にしているか、その上で、地域や国にどのような貢献が出来るか、社会での存在意義は明確か、などが問われている。については、ホワイト企業情報や人を育てるサポート情報を分かりやすく提供する必要がある。  
（杉委員）
- 子供たちは自ら判断できる素地を身につけ、自分に得であるか損であるかという前に、世に役に立つ人材になるために自分は将来どのようになりたいか、そのためには、若い時に何をしておくべきかを自分で考えることが重要であると思う。小・中・高校の教育を通じて、個々人が聴く耳を持ち、相手の意見を理解して判断し、自分の言葉で意見を言い、語り合える人材に育てることが肝要であると思う。出来れば、静岡県で活躍する人材を目指して欲しい。  
（杉委員）
- 子供の頃から農業、漁業、林業、手工業など大人の仕事を体験させること、大人の仕事への興味と誇りを体験させることが必要である。（渡邊委員）